

BILLY JOEL

THE STRANGER



あの日のことがよみがえる

ビリー・ジョエル「The Stranger」を聴くと、あの日の事がよみがえる。

九月に入って海の家が少しずつ取り壊され、喧騒で賑わっていた浜辺も静けさを取り戻している様子がニュースで流れている。

その日は午後から雲行きが怪しくなり、夕食を過ぎた辺りから強風を伴った雨が窓を激しく叩き、あたかも台風のお出ましで雨に取り囲まれ周りから取り残されたような静かな空間が部屋に漂っていた。

こんな日は車の運転するには、事故でも起きたら面倒だ。外に出ないようにしよう……。雨は一向に止む気配はなく、前にも増して雨音は激しく音を奏でているまるで台風の夜にロウソクに火を灯し楽しんでいるかのようだ。

しかし、戸を閉め切った部屋の中は、座っているだけで体中の毛穴から汗が噴出してベタベタして蒸し暑い。明日も雨で通勤渋滞がよりいっそうの渋滞に巻き込まれる事を考えただけで憂鬱になっていた。そんな不安が頭を過ぎり早々と床に就いた。

眠りは得意とするので目を瞑るとすぐに夢の世界に飛び込み楽しんでいた。

午前2時。静寂さは掻き消され、激しく打ち鳴らす雨音に呼応するかのよう、けたたましく電話の音が鳴り響き叩き起こされた。

寝惚け眼で受話器を取ると栃木県佐野市に住む友人K氏からだった。

「寝ている時に悪いですね」

「大至急のお願いがあるんです……。」

眠い目を擦りながら「はい！久しぶりですね……で、何でしょう？」

「練馬に住む彼女が自殺しそうなんです」

「急に連絡が取れなくなってきたのです。……見てきて欲しいのですが」

「自殺」の声を聞いて眼は完全に醒めた。

「詳しく聞かせてください」

「先ほど、電話が入って、もうお別れです。今から自殺をしますと云って来たんです」

それは、大変だ。

すぐに私は、ペンを走らせ住所を聞き目安となる近くにある建物の特徴を聞いてメモをした。降りしきる雨はいっこうに止む気配はなく、心が重かった。自殺をしていたらどうしよう……と、考えた。

雨の中を歩くことを考えて、濡れても良いように半ズボンにTシャツと云ったコンビニ服装に着

替え、土砂降りの雨の中を出かけた。こんな大雨の日には運転したくないと思っていたが、事は急を要した。

雨は小降りになる気配もなく、だんだんとひどくなり強い雨となっている。

ワイパーの速度を早くしてもフロントガラスを叩く雨を消す事が出来なく視界が悪く、焦る気持ちで練馬方面に向かった。

聞いた地図を頼りにアパートの色や建物の形を探しまわるが、雨で街灯もぼんやりと薄暗く、目的の場所にたどり着けない。東京って便利だなと思うことがある、至るところに直立不動で立っている電信柱には、番地表示が貼ってある。ひとつひとつの電信柱を探し貼ってある番地表示を確認した。

「ここだ 間違いない」

アパートの玄関に入り、聞いた1階の部屋を確認してノックするが応答がなく、隙間から漏れてくる明かりも消えている。もう死んでいるかも知れないとの不安が脳裏をかすめる。激しく戸を叩いても何の反応もない。

降りしきる雨の中をアパートの裏に回り、閉め切っている雨戸を確認すると、車に戻り工具箱からドライバーを取り出し、雨戸をこじ開けた。

まるで泥棒のようでもある

雨の中を半ズボンの男がドライバーでこじ開けている様子を見られたら、ものの数分でサイレンが轟き、ねじ伏せられるんだらうな・・・雨で良かった。

雨の音で戸をこじ開ける音が消されて幸いした。

ずぶ濡れになり、まるでジョージ秋山氏が描く「アシュラ」のようであった。

雨戸を外し、中に入ると部屋は真っ暗で物音ひとつしない。

手探りで灯りのスイッチの紐を探して引っ張った。

パッと明るくなった部屋の片隅に横たわっている彼女を発見した。周りに目をやると睡眠薬であろうか、空になった瓶が転がっている。

「死んでるのか？」と、思い。

びしょ濡れになった体の私は、彼女を抱きかかえ彼女の顔に耳を近づけた。かすかに息をしているように感じた。

すぐに、台所に行き、洗面器を持ってくると彼女を抱きかかえて無理やり口を開けると指を突っ込み吐き気を促し、背中をさすった。むせるような声をだし咽喉が鳴り嘔吐した。

洗面器の中は白い液状や固形で埋め尽くされ、コップに入った水を飲ませて、我に返った彼女は

気が付き泣き始めた。

自殺したい理由はうすうす分かっていたので、改めて聞く事はしなかつた
ずぶ濡れになった私を見て

「助けに来たの？」「助けてくれたの？」と、声を上げて泣きじゃくり、体が震えている。

ギシギシと音を立てていた風は静かになり、降り続く雨音だけが聞こえてくる蒸し暑い夜。
彼女は、何かに怯えるようにガタガタと震え泣いていた。

「生きてて良かった！」と、思うと同時に、ずぶ濡れの私は急に寒さが襲ってきた。
部屋には洗濯物が干してあり、都合の良いことにK氏の物と思われるTシャツが干してあり、勝手に着替えさせてもらった。

コップに注いだ水を何杯か無理やり飲ませて

「大丈夫かと聞いた」

「はい もう大丈夫です Kさんに聞いてきたのですか？」と聞いてきた。

「ウ・ウ・ウン(._;) 電話が掛かってきたんだ」

「来ては悪かったかな？」

「いいえ・・・ありががとうございます」

鳴き声であったが、しゃくりながらはっきりと応えた。

びしょ濡れの私が抱きかかえたので、彼女もびしょ濡れになった。

着替えた方がよいよ・・・着替えはどこ？

まだ、睡眠薬が効いているのか体の自由がスムーズに行かずにヨロヨロとしているので、俺がやるからジッとしていてとベッドの横に座らせ、パジャマを脱がせた。雨降る深夜に服を脱がせ裸にした彼女の体を触れながら間近で見るとは・・・男として、襲いかかりたくもなるが、そんなことは思いもしなかった。タオルで体を拭き、タンスから持ってきたパジャマに着替えさせた。

K氏に電話しなくては・・・と、電話を探すと電話線が抜かれていて、連絡付かないようにした彼女の強い気持ちが現れていた。

電話の向こうでは、生きていてくれ！と、願う相手がいる。早く連絡をしないとと思い、電話線をつないでいると「あの人に、電話しないで！」「いまは、連絡をしないで欲しいの・・・」と、また泣いた。

落ち着いた彼女の様子が、まだ安心出来なく、ベッドの横に二人で並び体を寄せ合うように毛布を掛けて座り、いまの気持ちを聞いた。

K氏に奥さんがいることを承知で付き合いはじめたのに、不倫の辛さに泣き深い愛情が死へと向か

わせたのであろう。

「もう考えるのが嫌になった」大好きなビリー・ジョエルの「ストレンジャー」を聴きながら死にたかったと云った。ベッドの上に置かれたラジカセの中にはThe Strangerのカセットがセットされていた。

まんじりともせず朝を迎え、笑顔の戻った彼女にコーヒーを沸かし、二人でモーニングコーヒーを飲んだ。K氏から電話を貰わなかったら、いまごろは死んでいたかも知れない。

「聴いて良い？」ラジカセのスイッチを押した。朝聴くThe Strangerは雰囲気違って聞こえた。

雨も上がったようだ。

学校に通う子どもたちの話し声が聞こえてくる。私も仕事に行かなくてはならない。

「大丈夫？」

「平気です！」「助けてくれてありがとうございます。」と、笑ってくれた。

いろいろとあった二人だが、その後は紆余曲折を経て結婚した。いまは栃木県宇都宮市に住んでいる。

忘れ得ぬ曲としてThe Stranger。

この曲を聴くたびに友人K氏と彼女の顔を思い出す。

そして、私の瞼の奥にはK氏以外には見せたことはないであろう、彼女の一糸まとわぬ全裸のひとこまひとこま焼き付いている。